平成十五年度

別府史談会

市内史跡探訪会

宝泉山実相寺

平成十五年（二〇〇三）八月十七日（日）、別府史談会主催、平成十五年度市内史跡探訪会が行われた。参加者は五十五名。午前九時に朝日小学校前から出発し、最初に火売四組にある曹洞宗（そうとうしゅう）宝泉山実相寺に参拝見学した。先ずは本堂にて楠 正文住職および楠 正寛副住職の説明を受けた。

この寺はかつて、実相寺山の東麓にあったが、慶長五年（一六〇〇）、石垣原合戦の際に焼失し、その後荒廃していた。延宝（一六七三～一六八一）の始めに、肥前佐賀の僧、即現禅師が当地に移したと言われている。当時は「実相山宝泉寺」と号していたが、天和二年（一六八二）豊後森藩主久留島家の菩提寺である玖珠の安楽寺第七世茂林禅師が開山となり、享保年間（一七一六～一七三六）に現在の山号宝泉山実相寺に改められたという。江戸時代には鶴見村は一万四千石の豊後森藩の飛び地であった。同村は明礬やハゼの生産を通して森藩の財政に大きく貢献しており、実相寺は玖珠の安楽寺の末寺として藩主から知行七十石を賜っていた。

火男火売神社

次に火売八組－一にある温泉の守り神、火男火売神社を見学した。会員たちは神楽殿にて加藤兼司宮司、牧 弘之権祢宜（ごんねぎ）から説明を受けた。当神社は創建年代は明らかでないが、宇佐神宮をはじめとする延喜式内社、県内六社の一つに数えられる古社である。

貞観（じょうがん）九年（八六七）、鶴見岳が噴火した際に、神前で大般若経を唱えて火を鎮め、その功績によって正五位下を朝廷から授けられ、以来火を納める神として祀られている。

天正（一五七三～一五九二）の頃、大友宗麟により社殿を焼かれたが、江戸時代（一六〇三～一八六七）になり豊後森藩主、久留島侯の崇敬も代々厚く、社殿も棟札によれば、柞原（ゆすはら）大工、矢野家の手により、寛文（一六六一～一六七三）・文政（一八一八～一八三〇）の頃に建築されている。

明治七年（一八七四）、全社殿を焼失したが、同十四年（一八八一）に再建、昭和二年（一九二七）に神殿増築のために大規模改築され、三間社流造の本殿の屋根を、桧皮葺（ひはだぶき）に葺き替えている。

平成十二年（二〇〇〇）に一千百五十年祭を執行した。

史跡照湯

次に小倉（おぐら）の里、照湯を見学した。ここでは三重野勝人別府史談会理事の説明を受けた。鶴見村は石垣原合戦の翌慶長六年（一六〇一）に、森藩久留島丹波守康親（やすちか）の領地（飛地）になった。当時、鶴見村は北中（きたじゅう）村と原中（はるじゅう）村とに分かれていた。北中村の湯煙の上がる丘陵地帯が小倉（おぐら）の里で、江戸時代から明礬の生産も盛んであった。

当時、石像製の閻魔像が山手の入り口にあったが、現在照湯温泉の正面南側に復元されている。森藩の藩主はしばしば照湯へ湯治に訪れていた。天保十四年（一八四三）に祓川（はらいかわ）の氾濫で照湯が押し流された。同年六月から工事にかかり、翌天保十五年に竣工した。

「鶴見七湯廻記」は弘化二年（一八四五）に北中村庄屋、伊島重枝（いじま・しげすえ、直江雄八郎改名）によって書かれた地誌である。現在、遺構として石造りの浴場・石垣などが残り、当時の盛況をしのぶことができる。昭和四二年（一九六七）に別府市指定の史跡となる。

共同浴場は平成十五年（二〇〇三）四月にリニューアル・オープンした。それまでは混浴であったが新しく浴場を造り、男女別（日毎入れ替え制）になった。昔からある浴場（大名風呂）は建物入り口から見て右側の浴場である。

見学後、小倉（おぐら）婦人会の好意により温泉卵をいただき、十二時過ぎに見学会を終了、現地解散した。

実相寺山門

照湯